

ライトノベルの公立図書館における収集状況に関する研究

田中 翔太

【背景】読書離れが叫ばれる中で若年層に広く浸透しているライトノベルだが、公共図書館においていかに扱われているかが話題になることがあまり多くない。触れられるのは、学校図書館における所蔵状況や、学生を対象としたヤングアダルトサービスの実施の中で選書対象となることなどであった。

【目的】若年層に浸透したライトノベルに対して公共図書館は実際どのような対応をしているのかを、大規模な図書館から小規模なものまで、広い範囲を対象として直接調査を行い、それらの所蔵状況とそこから見える公共図書館の若年層への対応状況を掴む。また、ライトノベル所蔵に関する調査で主題として扱われやすいヤングアダルト分類についても並べて調査することで、以前のヤングアダルト分類中心の調査から見えない部分を探る。

【方法】全国の図書館を規模別の 5 つの区分を作り、各図書館利用者の利用度の指標として実質貸出密度を求めた。その数値をもとに区分ごとにベスト 10 の図書館を選出し、OPAC が利用可能であった図書館 47 館を対象とする。

対象図書は「このライトノベルがすごい！」2016 年版、2017 年版それぞれにおいて上位 15 位までにランキングされたものとした。ただし、中に 2 年連続でランキング入りしていたものが 5 作品存在したため、実際に対象とするのは 25 作品となった。各図書館の OPAC を用いて対象図書の所蔵状況を調査した。

【結果】半数以上の対象図書館がライトノベルを所蔵し、ヤングアダルト分類を行っていた図書館の 9 割近くがライトノベルを所蔵していた。このヤングアダルト分類とライトノベル所蔵の結びつきの強さは以前に行われていたヤングアダルトサービスのアンケート調査の中で、多くの図書館が若年層向けの小説を重視していたものと重なるものであった。反面、ヤングアダルト分類を行っていない図書館においても、4 割がライトノベルを蔵書し若年層の利用者のニーズに応えようとしていた。両者を合わせれば調査対象全体の 7 割強が若年層の利用者に対応しようとしていることになる。ライトノベル所蔵館はやはり大規模な図書館に多く見られたが、小規模な図書館で全く見られないということはない。図書館ごとの所蔵作品数をみると、一部の小規模なライトノベル所蔵図書館の所蔵作品数は大規模な図書館の所蔵作品数に匹敵、さらには上回るものも見られた。

以上から、公共図書館においてヤングアダルトに類する分類が行われていない図書館においても、ライトノベルの所蔵という形で若年層に向けた図書館運営を行っていることが示された。小規模図書館であってもライトノベル所蔵やヤングアダルトに関する分類は行われており、大規模なものにくべると数は減るが若年層に対する対応をしようとしていることもわかる。所蔵作品の選ばれ方には複合的な要素が見られ、公共図書館がライトノベルの所蔵をよく考えて行っていることが見て取れた。 (指導教員 松林麻実子)